

## V-1

## 多発性骨髓腫に対する自家末梢血幹細胞移植

谷村 聡、寺迫桐子、川畑公人、竹之内礼子、奥田慎也、平井理泉、田中 勝、萩原将太郎、三輪哲義

国立国際医療センター血液内科

【目的】多発性骨髓腫(MM)に対しては、通常化学療法に比べ自家造血幹細胞移植(ASCT)の成績の優位性が明らかになってきているが、本邦においてはまだ、多数例での ASCT の成績については十分に検討されていない。今回、私たちは、MM99 症例に対する ASCT の単施設での移植成績を報告する。【方法】1998 年 1 月から 2006 年 7 月までの間に、当科において移植を目指して治療を開始した 70 歳以下の Durie-Salmon II/III 期の MM の患者で、以下の基準を満たすもの。心機能・肝機能が保たれているもの。MM 関連の腎機能異常、MM による PS の低下は除外しない。コントロールできない感染症を有するもの、他の悪性疾患の合併は除外する。移植前治療、幹細胞採取術(SCH)、ASCT の完遂率と各段階の治療効果、生存率、移植関連死亡を解析した。

【結果】解析された症例数は 99 例。平均年齢 53 歳。平均観察期間 33 ヶ月。SCH を行わなかった症例は 15 症例。SCH 不応例は 4 症例。SCH に成功したが移植に至らなかった症例は 11 例。移植に至った症例は 69 例。このうち 2 回移植例は 29 例。平均生存期間は全症例で 65 ヶ月、移植症例で 71 ヶ月、非移植症例で 48 ヶ月。全 98 移植における TRM は 2 例(2.0%)であった。

【考察】MM に対する ASCT の安全性および治療効果を確認できた。新規薬剤の可能性は広がりつつあるが、臓器機能の保たれている比較的若い症例については ASCT を施行するべきと考えられる。今後、予後因子解析と治療反応性に応じた治療法の層別化の検討も必要と考えられた。